特集 フォーラム2017報告

全国被害者支援ネットワークは「全国犯罪被害者支援フォーラム2017」（日本被害者学会、犯罪被害救援基金、警察庁共催）を10月6日（金）午後1時から東京都千代田区のイイノホールで開催しました。22回目の今回のテーマは『性犯罪被害者支援の充実をめざして』で、全国の被害者支援センターや行政機関、警察などの関係者、一般の方も加え約500人が参加しました。

第一部では、まず平井紀夫全国被害者支援ネットワーク理事長が開会挨拶に立ち、全国48犯罪被害者支援センターにおける平成28年度の相談件数が約24,450件、直接的支援が約7,800件に上り、犯罪被害が減る中で支援活動が増加している現状を紹介するとともに、その活動の約49％が性犯罪被害者の支援であり、各センターが多くの課題を抱えながらも「被害者の方が全国どこにいても、いつでも求められる支援が受けられる」ことを目指して取り組んでいる実情を示しました。そのうえで、このフォーラムで「性犯罪被害者の心情をご理解いただくとともに、今後の活動に多くの示唆を得て、明日からの活動に生かしてほしい」と述べました。続いて来賓の小此木八郎国家公安委員会委員長、澤野正明日本弁護士連合会副会長から挨拶をいただきました。

フォーラム2017　平井理事長による開会挨拶

平井紀夫理事長

引き続き、犯罪被害者支援功労者表彰では特別栄誉章2名、栄誉章4名、犯罪被害者支援功労団体3センター、犯罪被害者支援功労職員1名に表彰状などを授与しました。また長年、犯罪被害者支援活動に協力・貢献していただいた4人の方々と1社に感謝状を贈呈しました。

このあと「被害者の声」として、音楽デュオPANSAKU（パンサク）のPAN（パン）として、ご自身の被害体験を基にした作詞曲「STAND」を発表し、被害者を励ます演奏・講演活動をしてこられた早川恵子さんに『性犯罪被害に遭うということ～被害者の私が自分らしく生きる選択～』と題してご講演いただきました。

早川さんは被害から13年経った今、夫とともに2人の息子さんを育てる「ごくごく普通の主婦」だそうですが、講演では恐怖と絶望でフリーズする中、死を覚悟し「自分自身の存在が完全否定され、自分がなくなっていく」と感じた被害時の心境や、警察、産婦人科病院での酷い二次被害、何年も襲ってくるフラッシュバックや自責の念、自殺願望などに傷つき苦しめられた日々を、赤裸々に振り返られました。被害から約6年後、ずっとそばにいてくれた友人とPANSAKU結成し、2014年まで被害者支援活動を続けたあと、現在は母親として「普通の生活」を生きる早川さん。「少しずつ自分を取り戻せたのは、友人やいろんな人がいつもどこかで自分に繋がっていてくれたこと」と語り、自分らしく生きる選択として「被害者の人たちを孤独にしないよう、自分が話せることを話していこう」と被害者支援への思いを話されました。また、やまがた被害者支援センターの依頼で早川さんが地元学生たちと作った二次被害を防ぎ、被害者に届ける曲「君のとなり」を使ったDVDが上映されましたが、辛く、苦しく、酷い被害体験とそれに続く日々を乗り越えたご自分をありのままお話しされた早川さんに、会場からは共感と感謝の拍手が鳴りやみませんでした。（4ページに詳報）

第2部のパネルディスカッションは『性犯罪被害者支援の現状と今後の展望』をテーマに、犯罪被害者支援センター、医療機関、警察（臨床心理職）の専門職3人が性犯罪被害者の支援現場で抱える課題や問題点を出し合い、改善すべき点や今後の方向について議論しました。（6ページに詳報）

最後に黒澤正和犯罪被害救援基金専務理事が閉会挨拶を述べ、午後5時すぎに閉会しました。

黒澤正和専務理事

発行：公益社団法人全国被害者支援ネットワーク